

2.3 真那板山の崩壊（位置 No.④）	
発生年月日	文亀元年十二月十日（1502.1.28）
発生地点	長野県小谷村大字北小谷真那板山
緯度・経度	36.8736, 137.8828
発生誘因	越後南西部地震（M=6.5～7.0）
天然ダムの形成	有・無
被害状況	人的被害：不明、家屋被害：不明
災害概要	八木貞助（1949）によると、「東岸の真那板山が崩壊して、蒲原温泉裏の葛葉峠に土砂が押出された。峠には、蛇紋岩の大きな塊が散乱し、今もなお、崩壊箇所を確認する事ができる。この堰止めによって姫川は湛水して、上流の北小谷村下寺まで水が上がり、同所の常誓寺前の二本の樺が埋没した。そのため、同寺は糸魚川町に移転した。」と伝えられています。また、北小谷村来馬の常法寺の上には一本杉という地名があり、山崩れによる天然ダムがあったときに舟を繋いだという言い伝えが残っています（信濃教育会北安曇部会，1930）。



位置図

国土地理院「標準地図」に加筆

※発生年、発生誘因は諸説あります。

◎ 真那板山の大规模崩壊と天然ダム

写真 2.4 は、真那板山の大规模崩壊とその堆積物を示しています。

真那板山の西斜面は、標高 1,123m の標高点を頂点とする急斜面です。対岸には直角三角形の台地状の高まり（葛葉峠，写真 2.4 の D）が存在します。

写真 2.5 は葛葉峠を上流から望んだものです。この高まりの急崖部には大きな珪質岩塊が多く露出していて、全体が複雑に砕かれた乱雑な堆積物であることがわかりました。現在は写真 2.6 に示したように、表層部の崩壊防止対策として、法面保護工が施工されているため、堆積状況はわからなくなっています。県道（旧国道 148 号線）の葛葉峠から東方に通る林道に入ると、今でも巨大な転石が多く存在します。



M：真那板山崩壊斜面，D：崩壊堆積物

H：姫川，Ls：地すべり地形

写真 2.4 真那板山の大规模崩壊とその堆積物
（井口撮影，井口・八木，2012）

この崩壊地の規模は、幅 1,200m、奥行き 1,200m、落差 820m で、5,000 万 m^3 の堆積土砂が現在も残されています。天然ダム^①の最高水位を崩壊土砂の堆積面高度と同じ 450m とすれば、最高水位時の湛水高 140m、湛水面積

270 万 m^3 、湛水量 1.2 億 m^3 となります。湛水範囲の上流部の^{くるま}采馬河原は稗田山の大規模崩壊時の土砂流出によって（町田，1964,1967）、姫川の河床が 20~30m も上昇しているため、実際の湛水量はもっと多いものと考えられます。



写真 2.5 真那板山大崩壊による河道閉塞堆積物，
1997 年撮影
（新国界橋は流失している）



写真 2.6 対策工事後，2011 年森撮影
（新々国界橋は 1998 年に再建された）

◎ 天然ダムの形成時期

真那板山の大規模崩壊はいつごろ発生したのでしょうか。小疇・石井（1996,1998）は詳細な地形・地質調査を行い、蒲原沢左岸に存在する湖成堆積物の粘土層内の木片の ^{14}C 年代から 510 \pm 90 年 B.P.（Gak-18,963）の値を得ています。この湖成層の存在から、天然ダムは数十年間続いたものと考えられます。

古谷（1996）は、「越佐史料」から文亀元年十二月十日（1502.1.28）の越後南西部地震を誘因に挙げています。『越佐史料』によれば、文亀元年十二月十日（1502.1.28）に「越後ノ地大二振フ、死者多シ」と記載されていることから、この地震が真那板山大規模崩壊の発生誘因であると推定しています。

宇佐美（1996）、宇佐美ほか（2013）によれば、「この地震の規模は、 $M=6.5\sim 7.0$ で、越後の国府（現上越市直江津）で潰家および死者多数、余震 5，6 日続く。会津でも強く揺れたという。」と記されています。

石橋（2020）は、「1502 年の地震が越後府中（現上越市直江津付近）の直近で発生したとすれば、府中付近で大きな被害を生ずるだろうが、その場合に約 45km 離れた真那板山付近で強震動が発生して大崩壊が生ずるかは疑問である。」と述べています。この点については、文献史料の追跡と放射性炭素年代や年輪年代などを追加して、さらに検討していく必要があります。

信濃教育会北安曇支部（1930）によれば、写真 2.7 に示した来馬の常法寺は当時^{かみでら}上寺と呼ばれており、この寺付近まで水が上がったという言い伝えがあります。この天然ダムが満々と水をたたえていたころ、常法寺（現存、位置は図 2.7 参照）の上には杉の大木があり、穴をあけて舟をつないでいました。その杉は舟繫杉とよばれ、写真 2.8 に示すように、現在は根株を残すのみですが、石塔が現在でも残っています。

^{しもでら}下寺の集落には浄専寺がありましたが、湛水池の下となったため、破壊され、姫川下流・右支流の根知川の仁王堂地区に移転しました。その後、写真 2.9 に示すように、現在糸魚川市新鉄一丁目に移転しています。移転後は^{じょうせんじ}常誓寺と名前を変えています。この寺の檀家は現在でも来馬と下寺集落に残っており、常誓寺との交流が今も続いています。

図 2.6 は真那板山崩壊と葛葉峠台地の地形形成過程模式図（松本砂防事務所，2003）です。

コラム 塔の峰

真那板山の大规模崩壊に関する数多くある伝説の中には、大规模崩壊が起きた際の様子を想像できる話が残っています。ここでは、小谷村に残る「塔の峰」の伝説をご紹介します。（図 2.7 参照）

「深原に塔の峰という所がある。昔、五重塔が流れてこの地についた所だと言われている。

常誓寺の塔が地変のために漂着したのであろうという。そして一本杉と塔の峰とは水平線上にあったと伝えられている。これによっていかに水かさが多かったかを想像し得るのである。」

郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』301 p, 銀河書房, 1986.



写真 2.7 来馬の常法寺，2012 年撮影
（手前は蒲原沢災害の慰霊碑）



写真 2.8 舟繫杉と石塔，1999 年撮影



写真 2.9 糸魚川市新鉄一丁目の常誓寺，2012 年撮影

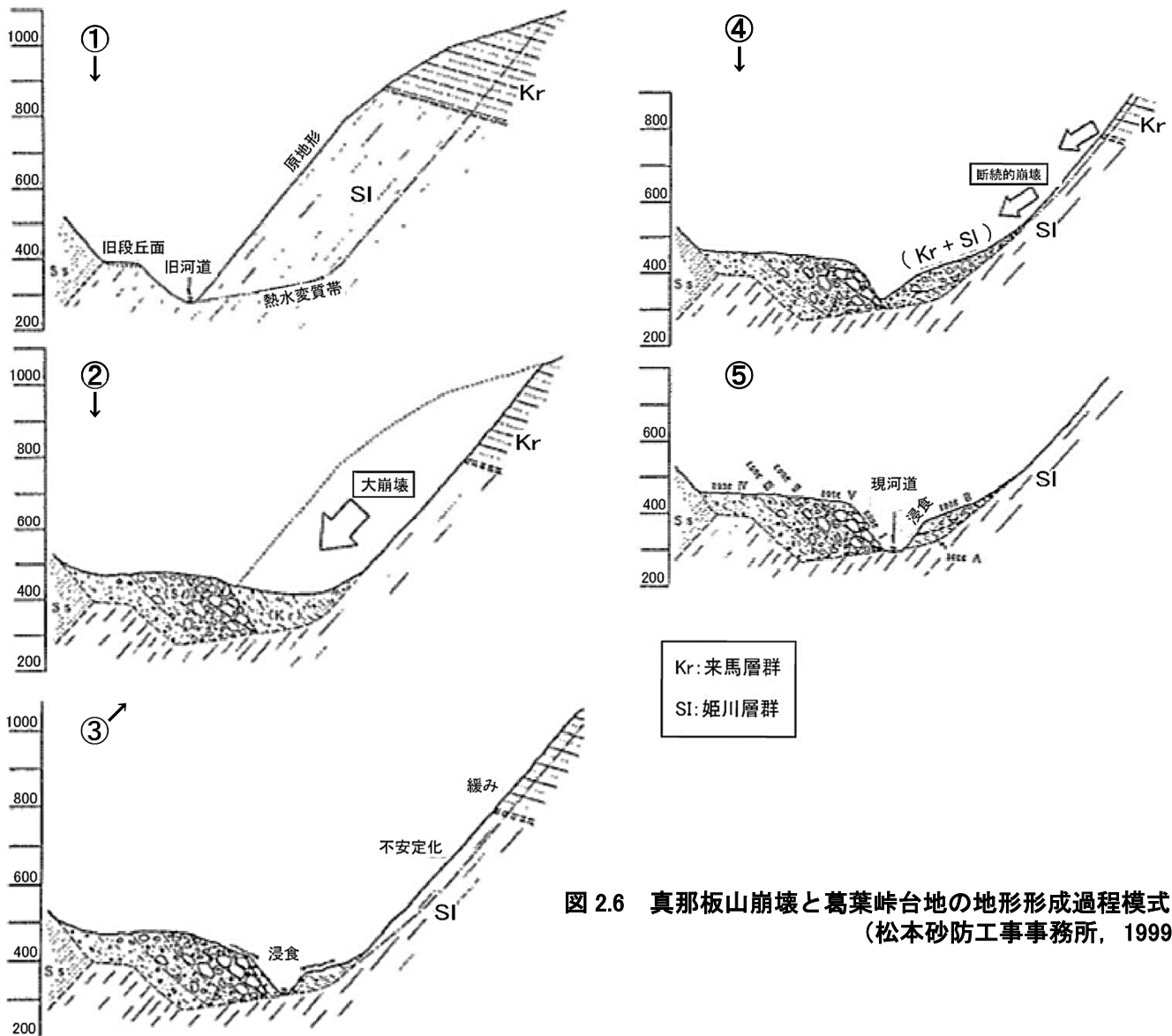


図 2.6 真那板山崩壊と葛葉峠台地の地形形成過程模式図
(松本砂防工事事務所, 1999)

コラム あいの町（愛ノ町）

現在までに真那板山の大规模崩壊の発生時期を特定する地震記録や具体的な歴史資料は発見されていません。しかし、小谷村には真那板山の大规模崩壊と天然ダムの存在に関する伝承が数多く残っており、来馬の一本杉も、その一つです。ここでは、小谷村に残る「あいの町（愛ノ町）」の伝説をご紹介します。

「北小谷村の北境にある葛葉峠の地下には、昔あいの町という村があったが、真那板山が崩落したとき地中に埋没されたものだと言われている。

その亡念によるのだろうか、時折鶏の鳴く声が聞こえるという。」

郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』301 p, 銀河書房, 1986.



図 2.7 真那板山崩壊と天然ダムの想定湛水範囲 (地理院地図に加筆)

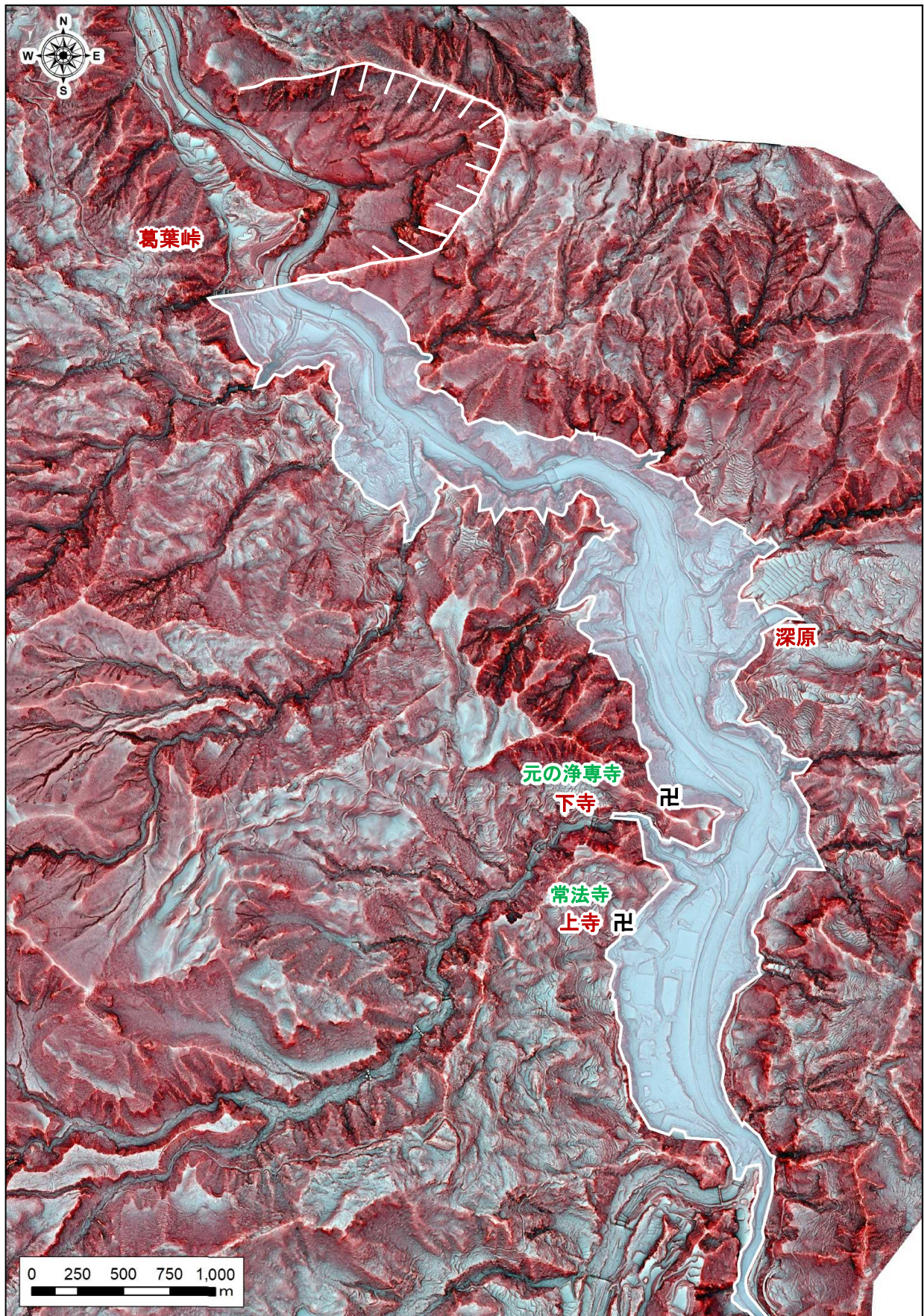


図 2.8 真那板山崩壊と天然ダムの想定湛水範囲の赤色立体地図